始一貫してたつぷりとよく描かれてゐる此覺壽を、古靱氏一流の手堅い巧緻さで、聽衆に得心が行くやう、微に入り細に入つて語り生かされました。

その中でも殊に印象の深かつた一二を擧げると、僞せ迎が返へしに來た丞相に對する不審の中の喜びから、いよ〳〵本物の丞相を見て「どちらがどうぢや輝國殿」、「問はるゝ人も問ふ人も」と呆果てる表現、落入る太郎を「憎いながらも不便な死ざま」と娘の仇敵をさへ憐み、「娘が最期も此刀、聟が最期も此刀、母が罪業消滅の白髮も同じ此刀」とはかない思ひの一句〳〵を極めて鮮明に語盡されました。

傑作の覺壽とゝもに、人間道眞の刈屋姫に對する情味「子鳥が鳴けば親鳥も」の苦衷など無論結構であつたが、唯問題は木像の奇蹟です。

道明寺雜感

中野　孝一

「菅原傳授手習鑑」に由緣のある吉田神社の傍に隱棲されてゐる、大西さんの嚴父のお宅で早目の夕飯を頂いて、大西さんと吉永さんと三人連れで始まるすこし前に會場へ着く。

此點に關して私は一度ゆつくり同氏に訊ねて見やうと思ひながら其機を得ませんが、つまり木像と眞物との差違をどういふ心持で語りわけるべきやといふ問題です。私は刈屋姫に對する場合以外、いつも神秘的で神々しい或ものが基調とされるべきではないだらうかと思ひます。無論此れは單なる愚見に過ぎませんが、今回は此神秘的な分子がまだ十分ではなかつたやうに思はれてなりませんでした。

最後に一言したいのは此終曲で、名物のもくげんじゆなど、丸本で僅數行程であるが、聽いてゐると少々長過ぎるやうに感じられます。盛澤山の事件で大分耳が勞れた爲かも知れません。それを引締め引きたて「見返り玉ふ御顏ばせ」の悲壯な姿を目前に髣髴させ得たのは、何といふても清六氏の絃が大いに貢献したからである事を附記したいと思ひます。

門を入らうとすると青葉に掩はれた京大學生集會所の古風な建物の中から、右往左往する學生のざわめきを縫ふて、思ひがけなく太棹の音が浮き立つやうにきこへてきた。文樂座の

表口などでは味へない妙な郷愁に似た、ひなびた素樸な情趣であつた。私は思はずそこに立ち止つて眼をとぢて、幼時田舍の掛小屋芝居の木戸口へ人につれられて近づいた時、蹇張りの外まで響く三味線の音色に惹きつけられ、一人で驅け込みたいほどにはづみ切つた童心の、至醇な觀劇の氣持が實に久しぶりに脈々と甦る追憶の樂しさにひたつたのであつた。

今夜は一つこういふ素直な氣持で心ゆくまでたのしませて頂かう。それにしても何といふ結構な一宵であらうと思ふにつけ、主催者の太宰博士、武智、鴻池兩氏の並々ならぬお心づくしお骨折の忝けなさがありがたく思はれる。聽衆の學生諸君はあの廣い會場に溢れるばかり、力强く伸び上らうとする若い人たちが、古い傳統の底に流れる瑞々しい生命力に憧れよる、好もしく頼母しい聽衆風景も又私を大に悦ばせた。

開げた窓からは青葉風がしきりに吹き入つてゐるはずなのに、人いきれのせいか厚著のためか、むせるほどあつい。やがて待ちかねた織大夫と團六が床へ上ると雜音防止のためすつかり窓はしめられてしまつた。これではたまらないと觀念したが、きいてゐるうちに熱さはいつか忘れて、物語の世界へ完全に運れこまれてしまつたのである。それほど同夜の織大夫の出來は素晴らしかつた。悠々とまづ語り手が藝三昧に沒入して樂しんで語るよさは、先日の文樂の鬼界ケ島の比ではなかつた。覺壽、宿彌太郎、立田の前等、主要人物はそれ〴〵正當に性根づけられ活描された上、情味の表現、人物の躍動渾然たり矣。この人の傑作の一つとして推賞したい。

慾をいへば宿彌太郎の笑ひに今一つの自然さと奔放さがほしかつたが。

切の古朝大夫清六の「相丞名殘の段」は、氣品と情味において當代無比なるのみならず、先人にこれを求めて果して誰がこれほどに語り得たらうかと思はれるほどに語り得たらうかと思はれるほどの神品だつた。

この人の素語りをまのあたり聽くが始めての私には、いつもの文樂できくのとは異なつた純な感銘に醉はされたのであつた。

もすこし何か書くつもりであつたが、武智氏鴻池氏太宰博士をはじめ、當夜參會の同人諸賢がそれ〴〵のお立場から御高見をおもらし下さるはずになつてゐるさうだし、私はせつかくかきつけた心覺へを不念にもなくしてしまつたので、どうにも仕方がないのでお許しを蒙つて、道明寺について一つの愚見を責めふさぎに提示させて頂く事にした。素直な童心に歸つて淸聽した印象としてはどうかとおもはれぬでもないがこれは當夜の感想ではない。かねゞ〴〵心の中に抱いてゐた疑問だつた。それはこの段は相丞と刈屋姫との生別を主題にしてゐるといふ定說にあき足らぬものがあるのである。

竹田出雲が寺子屋を、並木千柳が佐太村を、そしてこの道

明寺が三好松洛で、三人の優れた作者が腕に撚りをかけて、力一ぱいに筆を揮つてゐるだけに、場面の變化敍情の妙その呼吸の旨さは、知らず〳〵のうちに藝術的夢幻境に惹き入れられる古今の名作であるが、この二段目の切場だけはどうも一つピツタリとせまつてくるものが乏しいやうに思はれるのである。だからといつてこの段が他の寺子屋佐太村に比して劣つてゐるといふのではない。相丞と刈屋姫との親子別れのみをこの段の生命とのみ局限する時、他の二つ、寺子屋の松王小太郎、佐太村の白大夫櫻丸の二組の眞の父子の悲劇に出して、この段の義理の父娘を拉してきた素材の力弱さがさういふ不滿をそこはかとなく私に感ぜしめるのである。これはあさとい先入主のせいかども思つて長い間時たま聽く度毎によく〳〵心してきいたものであり、殊に當夜は私一生涯これ以上のこの段を再びきく折はあるまいと、全身を耳にして一語一句をかみしめて味ひその出來榮に絶讃のまことをさゝげたにも拘らず、やつぱりその不滿だけは解消しなかつた。どう味ひ直してみてもこの生別の悲哀感が今一つ自然に切實に盛り上つてくるまことの情愛を感得しなかつたのは、私のつむじ曲りの根性のせいだらうか。菅相丞は申すまでもなく古今の大忠臣で大學者で神とまつられるほどの神人で凡下の人情にあまり露骨に執着しない、こういふ只人でない人の特異な別離の哀情に作者の覗ひがあつたものらしく、あの段切のツヤを消したウレヒの音づかひに、氣品と哀感の錯綜した漂渺たる地合の風趣はこの段獨自の妙味であつて、古靱と清六によつて釀し出された滋味萬斛の節奏美の快い詩的恍惚境に思はず惹き入れられはしたが、どうしても切實な人間味に乏しい憾みのあつた事は否めなかつた。

それよりも覺壽と相丞との伯母甥の別れの方がよく出てゐるのに心ひかれる。枕の「早刻限ぞと」のこの短い一句に、可愛いい甥に生別の時刻のせまつた伯母のやるせないつらさが、痛々しいまでに實感に滿ちて語られた。これは作者の腕といふより、古靱の創造的演出として特筆すべきものかもしれないが。續いて「百日千日泊めたりとて別るゝ時は變らぬつらさ」の老の繰言に、人間の哀別離苦の思ひが象徴的に高められて語られたものとして、人間苦に徹した古靱の藝境の尊さに心をうたれ、この段における覺壽の地位の重大さを人一倍感じさせられたのであつた。

だが一等私の心を強く衝撃して、この段に漲る光芒を與へたものは「初孫を見るまではと、たばひ髮した白髮、孫は得見いで憂目をみる」と、覺壽が娘に先立たれた血を吐くばかりの悲しみの聲である。この一句に他の寺子屋佐太村に對して親子別れの三部曲の一つとして、立派に拮抗し得る生命力を認め得らるゝのであるまいか。流石に古靱はあの透徹した理解力と、高貴な代償によつて購つた體驗の迸りによ

[illegible]

つて、これに餘人の企及し得ぬ眞實さを賦與した。そしてきくものゝ腸をえぐつた。

劈頭に甥に對する伯母の切ない別れの情涙をこぼしてみせたこと「孫は得見いで憂目をみる」に重點をおいて語つた古靱の意圖は、菅相丞と刈屋姫との生別のみを重視せず覺壽を中心とする骨肉相關の悲劇とする私の變痴奇論と靈犀相通ずるものがありはせぬかとも思ふ。

古靱大夫は「千秋樂の日はとりわけ心をこめて大切に語ります——」とかつて私に話された事がある。これでもう二度とこれを語る日がないかも知れない。こういふあの人らしい藝道一筋に生きぬいた人の高い心境から生れた心構へ、一期一會といつたやうな一種のさとり、深い藝愛の尊い心掛けには、思はず襟を正さずにゐられないおもひがしたが、今度の道明寺はひよつとしたらもう語れぬかもしれぬなどいふ漠然たる不安ではなく、太宰博士の解説の通り、文樂座の現狀、將來の見通しからいつて、その人がこれをこういふ風に完全に語り得ることはまづ絶無といつていゝ決定的な咄なのである。ふだんの千秋樂の日でさへ、それほどに心を入れて大切に語る人がもうこれ切りでといふ當夜の如き場合、如何に無限の愛執と感慨の一念をこめて語つたらうか。思ふだに美はしくもなみだぐましきことではないか。語る人もきくものにも一字一句にたまらない愛着の感じられる、心と心の交流し合つたえがたい一曲であつた。こういふ淨瑠璃史にも永く殘るであらう意義深い名演に接し得られた耳福を重ねて主催者の方々に深謝したい。

樂屋落ちじみた駄洒落で恐縮だが、古靱大夫と道明寺との名殘の段として、私は一入の興懷と愛惜をこの一段に繋いだものであつた。

端正なる熱演

辻部政太郎

五月二十六日夕、京大同學會文化部主催、太宰博士、武智氏等の肝煎で行はれた文樂鑑賞會に於ける古靱の「道明寺」は近頃の聽き物であつた。

「淨瑠璃雜誌」新舊同人の殆んどすべてに近い方々とお目に